



報道関係者各位

2025 年 11 月 17 日

国立成育医療研究センター

**日本人におけるナッツ類アレルギーを引き起こす摂取量が明らかに
～急増するナッツ類アレルギーは近年、より少ない量で症状が出る傾向に～**

国立成育医療研究センター（所在地：東京都世田谷区大蔵、理事長：五十嵐隆）のアレルギーセンター久保田仁美、福家辰樹、山本貴和子らの研究チームは、当センターで 2013 年～2023 年の間に行われた食物経口負荷試験の結果から、ピーナッツ、カシューナッツ、クルミアレルギーの患者において、どのくらいの量を摂取すると、どの程度の割合でアレルギー症状がでるのかを検証する「誘発閾値(ED: eliciting dose¹)解析」を行いました。

その結果、ED₀₅ 値（アレルギー患者集団の内、5%の人でアレルギー症状が引き起こされる量）はピーナッツが 4.88mg、カシューナッツが 0.53mg、クルミが 4.37mg であることが明らかになりました。

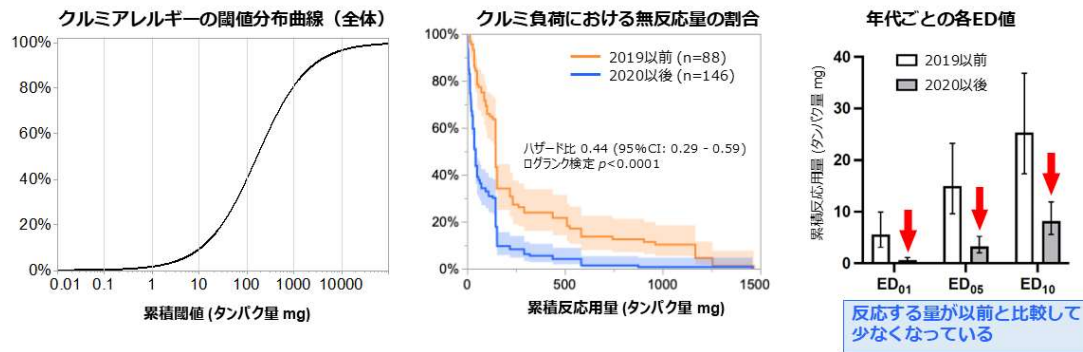
さらに、2013～2019 年と 2020 年～2023 年の ED₀₅ 値を比較したところ、クルミについては 2019 年以前では 14.94mg でしたが、2020 年以降では 3.26mg に大幅に減少していて、以前より少ない摂取量でアレルギーが引き起こされることが分かりました。ピーナッツとカシューナッツでは期間による閾値の有意な減少は認められませんでした、減少傾向は見られませんでした。

本研究結果は、米国免疫アレルギー学会国際雑誌 *The Journal of Allergy and Clinical Immunology: Global* に掲載されました。

	2013～2019年	2020年～2023年	全期間
ピーナッツ	8.87mg	4.12mg	4.88mg
カシューナッツ	4.29mg	0.66mg	0.53mg
クルミ	14.94mg	3.26mg	4.37mg

【表：各ナッツ類のアレルギーを引き起こす摂取量（ED₀₅ 値）の変化】

¹ ED 値：食物アレルギーのある人が特定のアレルギー（抗原）を摂取した際に、アレルギー症状が引き起こされる最小の量のこと。ED₀₅ 値は、食物アレルギー患者集団のうち 5%の人に症状が出る量。食品安全に関するリスク評価の国際的な専門家会合でアレルギー含有量の参照用量として採用され、症状を引き起こすリスクが低いとされる曝露量の目安とされているが、ED₀₅ は単に安全という意味ではなく、あくまで低リスクの目安であることに注意が必要。



【図：クルミに対するアレルギー症状の出る量の検討】

【プレスリリースのポイント】

- 2013 年～2023 年の 10 年間に国立成育医療研究センターの患者さんに対して行った 1,275 件のピーナッツ・カシューナッツ・クルミ経口負荷試験データを用いて、ナッツ類それぞれの ED₀₅ 値を算出したところ、ピーナッツ 4.88 mg、カシューナッツ 0.53 mg、クルミ 4.37 mg と判明しました。
- 2013～2019 年と、2020～2023 年の期間で ED₀₅ 値を比べたところ、アレルギーを引き起こす摂取量は低下傾向にありました。これは、以前より少ない摂取量でアレルギー症状が引き起こされる可能性があることを示しています。
- 特にクルミでは、2019 年以前は 14.94mg (95%CI : 9.60-23.2) でしたが、2020 年以降では 3.26mg (95%CI : 2.04-5.20) と有意に減少していて、日本におけるクルミアレルギー患者さんの増加や、重症化などの変化が影響している可能性があります。なお、ピーナッツとカシューナッツでは有意差は認められませんでした。
- 主要アレルゲン成分である Ara h 2 (ピーナッツ)、Ana o 3 (カシューナッツ)、Jug r 1 (クルミ) に対する特異的 IgE 値が高いほど、ED 値が低い傾向 (少ない摂取量でアレルギー反応が出やすい傾向) が示されました。
- 高 IgE 群 (50 kUA/L 以上) での ED₀₅ 値は、ピーナッツ 3.20mg、カシューナッツ 0.55mg、クルミ 1.92 mg でした。
- 食習慣がグローバル化する中で日本国内における食物アレルギーの原因食物も変化しています。今回の調査で、ナッツ類の ED 値は欧米で報告される値に近づきつつあり、食物アレルギーのリスク評価を定期的に見直す重要性が改めて認識されました。



【背景・目的】

近年、日本ではナッツ類アレルギーが急増し、アレルギーの原因食物の第2位を占めています。食物アレルギーでは、ナッツ類アレルギーは重篤な症状を引き起こすことがあり、科学的な根拠に基づく適切な食品表示が安全管理には欠かせません。近年、欧米を中心に、食品中の含有アレルゲンに対するリスク評価方法として、食物アレルギー患者における誘発閾値(ED: eliciting dose)解析が行われています。しかし、日本を含めアジア諸国でのED値データはほとんど存在せず、その実態は不明でした。

本研究では、当センターにおける10年間の食物経口負荷試験のデータをもとに、ピーナッツ、カシューナッツ、クルミにおけるアレルギー症状の誘発閾値とその経年的変化を研究しました。

【研究概要】

研究期間：2013年11月～2023年12月

研究対象：国立成育医療研究センターで研究期間中に食物負荷試験を受けた小児1,275例
(ピーナッツ 504例、カシューナッツ 182例、クルミ 589例)

調査項目：アレルギーのある人が、アレルゲンを摂取した際に症状を引き起こす最小の量であるED₀₁値、ED₀₅値、ED₁₀値。また、特異的IgE値との関連も解析。

方法：ピーナッツ、カシューナッツ、クルミに対する食物経口負荷試験の結果を区間打ち切り生存時間分析を用いて複数分布モデルにより解析した。

【発表者のコメント】

日本ではナッツ類、特にクルミアレルギーの発症がこの10年間で急増していて、近年の消費量増加との関係が示唆されています。今回の研究では、アレルギー症状の誘発閾値が欧米と同等に近づいたこと、そして日本国内でも時代とともに変化していることが分かりました。今後も食品表示や食物経口負荷試験・経口免疫療法の設計に、日本独自のデータを反映させる必要があります。

【発表論文情報】

題名：Trends over a decade in the prevalence and eliciting dose of peanut and tree nut allergies in Japan

著者：久保田仁美、福家辰樹、濱口冴香、平井聖子、豊國賢治、山本貴和子、石黒精、大矢幸弘

所属：国立成育医療研究センター

掲載誌：The Journal of Allergy and Clinical Immunology: Global (JACI Global) オンライン先行公開

DOI：10.1016/j.jacig.2025.100582

【問い合わせ先】

国立成育医療研究センター 企画戦略局 広報企画室 神田・村上
電話：03-3416-0181 (代表) E-mail:koho@ncchd.go.jp